
必然と猫タク

弥生 祐

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

必然と猫タク

【コード】

N1969C

【作者名】

弥生 祐

【あらすじ】

ふと男は考えた。この事象に必然性はあるのだろうか。

(前書き)

ファンタジーというより、メルヘン？

どっちにも自信がないけれど(汗)

必然と猫タク

宵の口を遙かに越えても、駅の構内は雑然としていた。赤提灯の店で一杯ひっかけた風体のサラリーマンが目立つ。その群れの間を縫うように靴音をたてる男もまた、グレーの背広で身を固めるサラリーマンだった。

駅を出ると円形の道路が夜空の下に現れた。バスのロータリーだ。近くには終電過ぎという時間もあり、必然として同じ目的を持つ職業車が何台も連なっている。

男は軽く酒を呑んでいた。とはいっても足取りは確かで頬も上気していない。男はタクシー乗り場に向かい、やはり必然的に一台の車中へと乗り込んだ。それはごく自然の当たり前の行動だった。

シートに深く座り、男は瞼を閉じて一息つく。そして目的地を運転手に告げようと視界を開けた時、男は目を疑った。料金メーターの隣り、運転する者が座るはずのそこに人間並みに大きい猫がいたからだ。

『（な、何故、猫が……）』

白の地に黒と茶がまだら模様を形成している。つまり三毛だ。やはり猫背なのか、その猫は丸く屈んでハンドルを握って（そう男に見えた）いた。

『……………』

幻覚を見るほど呑んでいない。そのことを男は自覚していたし、

酔っ払っていない自信もあった。しかし……猫は猫だ。運転席に当然のように居座る三毛猫は、啞然とする男をよそに口を開いた。

『お客さん、どちらに向かいますでしょうか？』

『あ、ああ。ええと　町まで……』

咄嗟に答えてしまつて、男は焦った。いや、焦っているのは目的先を誤つて伝えたからではない。猫が短く『ニヤ』と頷いて、タクシーを静かに発車させたからだ。

『びつくりされたでしょう、お客さん』

それはそうだ。驚かない方がおかしい。驚く方が自然ではないか。そう思いながらも、男は相槌を打つのをためらつた。

『いいですよ、何でも聞いて頂いて。そうゆうお客さん多いですか』

猫はこの状況に慣れていようで、申し訳程度にかぶる帽子を真つ直ぐ整えながら、男に質問を求めた。

『あ、ああ、ええと……じゃあ君は本当に猫なんだね？』

『何に見えますか』

『猫だね』

ピンポーン、と体を揺らして猫は明るい声を上げた。世の中には

不思議なことが多い。とはいえ、男の脳裏を掠めたのは至極、現実的な考えだった。

どこかにTVカメラがあるのではないか？ その種のいたずら番組を、男は見たことがあった。猫の顔はアニメーションにあるように、目が大きく、ヒゲは書いたように短い。最近では目につかない小型のカメラもあるし…… そこまで思考を進めると、男は平静さを取り戻した口調で猫に話しかけた。

『色々大変だね。ええとそれで、私は何かリアクションをとった方が良いのかな？』

『ああ、やはりそう思われますか。でもTVじゃないんですよ。まあ勘違いされるのは当然ですけど』

『はは しかし、ねえ。そうは言っても』

まだ茶番を続けるつもりなのか。確かに精巧に作られたCGのような着ぐるみだが、ネタが割れた以上、説明に入っても……と、男が口を開こうとしたが、唇の回りではなく、目の方の筋肉に、脳の指令が伝達してしまう。

無い。着ぐるみなら背中などにあるはずの、ジッパーの類が見当たらないのだ。

『まさか本当に猫だというのか……』

気付かない内にメルヘンの真っ直中に放り込まれたような、そんな錯覚を覚える男。しかしそれでも男は現実世界に戻ろうと、焦り出した呼吸を静めた。

『ええと、分かった。確かに君は猫だ。うん、そうらしい。しかし何故、タクシーの運転を?』

『そりゃあ生活のためですよ。家の可愛い妻と子供のために、稼がなきゃなりませんから』

ニヤツはっは、と猫は口を開けて陽気に(そう男には見えた)おどけた。

『あ、いや、そうではなくて。その……君が運転手をしている必然性が、どこにあるのかと思ってね』

『必然性……ですか。そうですね』 別に必然性は無いですね』

そつだろつと男が頷く。

『別に運転手じゃなくても良かったんですよ。食べていけるなら俳優でも、何でもね。ただ資格が車の免許しかありませんでしたから』

『免許?』

『ええ、普通自動車、猫運転の免許です。公安委員会発行の確かなものですよ』

何が確かで不確かなのか。それはともかく、猫の言う通り料金メーターの隣りに、免許証は堂々と飾ってあった。公安委員会のみならず、職業動物委員会の認可も受けているようで、赤い印が眩しい。

『それなりに苦労しましたよ。でも教官には良いドライバーになれ

ると、お墨付きを貰いましたっけ』

猫の言葉の説得力を増すように、タクシーは滑らかに道路を進んでいく。

『だからというわけじゃありませんけど、今は運転手をやってるんですよ』

『なるほど、ね』

『言ってみれば猫である僕と、タクシーの運転手である自分は矛盾することなく、必然性もなく、並列的に存在しているということですかね』

『並列的、か』

『そう並列的に』

なるほど、と男はもう一度呟いた。猫の運転はスムーズで上手だった。静かであり丁寧で、一度の急ブレーキもなかった。煙草も吸わず、ラジオの音量を不必要に大きくもしない。クラクションはほとんど鳴らさないし、しかるべき時に他の車に道を譲った。割り込みもしない、繊細で着実な運転。愚痴もこぼさず、男の感情を無視してペラペラとしゃべることも無かった。

なんとなくこれがあるべきタクシーの運転手の姿だと、男は感じた。そう思わせるに充分な運転だった。

気がつくと、男の目に見慣れた自宅が入ってきた。

『こちらでよろしいですか？』

『うん、ありがとう。とても快適だった』

料金を払い、男はタクシーを降りた。につこり（そう男には見えたと）と猫は笑い、静かにタクシーを発進させた。

数日後。

昼時に当然、昼食をとろうと入った、ある洋食店で、男は犬のウエーターに出会った。

『いらつしゃいませ』

犬は礼儀正しく、慇懃いんぎんに男を迎えた。注文の取り方も、水の入ったグラスの置き方も申し分のない犬だった。だが男は気にしなかった。犬がウエーターである必然性は無いのだが、彼はまさしくウエーターだったからだ。

『ふむ……』

ウエーターのあるべき姿、その男は瞼を閉じた。それは必然性など、まるで必要がないと真から頷く、男の姿だった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1969c/>

必然と猫タク

2008年8月29日17時34分発行